



(特集：パネルディスカッションⅡ (第31・32回合同年次学術集会より))

## 序文(巻頭言)：「検体検査の役割と今後」

齊藤 翠

### Preface: The role and future of specimen testing

Midori Saito

**Summary** As automated and efficient specimen testing progresses, the method of conducting specimen tests should also change. The use of specimen testing automation systems in recent years has not only increased specimen testing, but also automated the entire process from sample pretreatment to result report, thus increasing the efficiency of specimen testing. Notably, the role of the clinical laboratory technicians involved in specimen examination has reduced with the progress of automation. Herein, four clinical laboratory technicians involved in specimen testing discuss their future role and the possible issues based on the current state of automated laboratory testing.

**Key words:** Specimen testing, Automation, Systematization

第31・32回生物試料分析科学会合同年次学術集会(荒木秀夫・中根生弥 集会長)では、「臨床検査のピボット」をメインテーマに、～変革を遂げる医療技術を探る～と題してパネルディスカッションが企画された。今回は関東支部、東海・北陸支部の合同企画とし「検体検査の役割と今後」をテーマに4名の講師より検体検査の自動化が進む現在において、臨床検査技師の役割がどのように変化し、今後、どのようなことが求められるのかを講演いただいたので報告する。

本パネルディスカッションでは立場の異なる4名の講師に、検体検査の現状とこれまでの経験を踏まえ、今、我々に求められていることや、今後の課題、展望について講演いただいた。講演は『Ⅰ. 新人臨床検査技師の視点

から』に始まり、『Ⅱ. 生理検査を担当した経験から』、『Ⅲ. スムーズな診療を支えるために必要なこと』、『Ⅳ. 検査自動化が進む今、必要とされる検体検査技師とは』として、4名のパネリストより発表していただいた。その詳細は後述する各講師からの報告を参照されたい。

昨今、臨床検査室には効率化や省力化、コスト削減が求められているが、その影響を大きく受けているのは検体検査である。検体検査の現状として、多くの施設が検体検査自動化システムを導入し、検体前処理から結果報告までの過程において効率化を図っている。さらに、以前は1検体1検体確認していた検査結果も臨床検査情報システム(LIS)による結果自動承認機能を活用することで、1日のうち

藤田医科大学病院臨床検査部  
〒470-1192 愛知県豊明市沓掛町田楽ヶ窪1-98  
TEL: +81-562-93-2305  
E-mail: midori86@fujita-hu.ac.jp

Department of Clinical Laboratory, Fujita Health University Hospital  
1-98 Dengakugakubo, Kutsukake-cho, Toyoake-shi, Aichi 470-1192, Japan

に我々が目にする検査結果は以前と比較し格段に減少している。このような現状から、検体検査は『検体を装置に搭載するだけ』、『装置のメンテナンスができればよい』などの印象をもたれがちである。

検体検査の代表とされる血液検査は、臨床検査の中で最も依頼の多い検査であり、多くの患者の治療や健康増進に寄与している。また、検体検査は日々多くの検体を迅速かつ正確に報告することが求められており、それを実行するために検査の自動化やシステム化は必要不可欠と考える。自動化、システム化の促進により、検体検査における臨床検査技師の役割が軽減するかのようと思われることもあるが、各講師らの報告において共通していたことは、効率化により得られた時間を新たな業務拡大に活かすことであった。具体的には、以下の3点が示された。

- ・血液検査は少量で多くのバイオマーカーの検出が可能であり、新たなバイオマーカーの探索や検査試薬の開発、改良に取り組むこと。
- ・これまでは検査結果の報告に留まっていた

が、検査を総合的に見て臨床に対し情報提供を行うこと。

- ・タスクシフト、タスクシェアが推進されるなかで、検査データを活用し大きく診療に関わっていくこと。

今後の課題として、これらを実行し、更なる診療支援に取り組むことが必要であると考えている。また、これらを実現するには、専門知識とともに幅広い知識の習得と、コミュニケーション能力の向上が重要であるとされた。

自動化、システム化に加えて、今後、人工知能（AI）の導入が叫ばれており、臨床検査の在り方が少しずつ変わってきているのは事実である。現在は、検体検査に焦点が置かれているが、生理検査もまた同様である。我々は、臨床検査室のこれからの構想に合致した形でこれらを有効活用し、新たな診療支援に繋げていくことが重要と考える。今回の講演を、今後の臨床検査室の在り方を考える一助としていただき、取り組んでいくべき課題を見出していいただければ幸いである。